史料室だより No. 66 東洋英和女学院史料室委員会
発　行　2006年３月15日

ミス・ハミルトンと交換船

弘中　真由美

「ミス・ハミルトン」このお名前を口にするときなんと懐かしく、あたたかい思いが胸に広がることでしょう。私が戦後東洋英和の中学部に入りました頃、先生は山梨英和の先生を経て英和の保育科で教鞭をとっていらっしゃいました。ですから直接お教えをいただいたり、お話をうかがうチャンスはなかったと思います。しかし小学部から上がってきた同級生は言葉の端々に「ミス・ハミルトンがこんなお話をなさったの。こんなことをなさったの」とよく話してくれました。後述のエピソードもそんなお話の中の一つです。

ミス・ハミルトンは1888年８月17日カナダ東海岸のプリンスエドワード島でウェズレイ・ハミルトン牧師の娘として生まれました。その後マウントアリソン大学およびニューヨーク市音楽専門学校で音楽を学び、後に東洋英和に宣教師として赴任されたときに、音楽、英語、聖書などを教えました。ミス・ハミルトンが英和に赴任されたのは1917年でした。その頃に英和は、学校としての形をやっと整え始めました。

宣教師を日本に送り出したのはトロントに本部を置くカナダメソジスト教会でした。明治の初めキリスト教の禁制が解けたばかりの日本では、欧米諸国の知識を一つでも多く取り入れたいという機運に満ちていました。宣教師が滞在していた場所には多くの若者が集まり、聖書を学び、またキリスト教に入信するものも沢山いました。

日本の女子教育に身を捧げたいという情熱を持って来日した事実上の英和の創始者ミス・カートメルもそのようなリーダーの一人でした。日本でも宣教師によって設立された女子のための学校としては青山学院の前身であった海岸女学校、アメリカ・バプテスト派の横浜の捜真女学校などが小さな芽を出し始めていました。ミス・カートメルもいよいよ日本の子女のための学校を建てる時が来たことを祈りの中で神に啓示され、土地探しを始めました。麻布の美しい丘の中腹に格好の土地があるということを知り、購入には建築費も含め、まず1,000ドルが必要といわれると、すぐにカナダの友人のグーダーハム夫人にこのことについて手紙を書きました。しばらくして受けとった返事には次の様に書かれていました。「あなたの手紙を受け取って私はすぐに友達のミセス・アイキンズのところに行きました。そして２人で銀行へ行き500ドルずつ引き出してカナダ婦人伝道部を通してあなたのところへ送りました。」こうして土地を手に入れ、1884年10月生徒２人の小さな学校が始まりました。新校舎が落成すると生徒も徐々に増え、翌年には一挙に170名になり、予科と本科が設けられました。国内のキリスト教はさまざまな偏見を受けつつも、徐々に人びとの中に浸透し始めました。ことにいわゆる上流社会の人々は子女を東洋英和に入学させました。これはミス・カートメルの最初の目的とは裏腹に英語を学ばせたい、欧米の生活習慣を身につけさせたい、という親の願いが込められていました。政治的にはこの頃を頂点として欧米主義は急速に衰退し、天皇を頂点とする国粋主義が台頭してきました。明治の初めに創立された多くのキリスト教の学校は、この影響を受けて生徒数が減り、閉校に至ったところが少なくありませんでした。英和も生徒数が年毎に減ってしまいましたが、カナダミッションから支えられて、この時代を切り抜けました。

やがて年号は大正に変わり、生徒数も安定してきました。多くの宣教師が英和の教育のために来日し、多くの影響を生徒たちに与えました。ミス・ハミルトンは1917(大正６)年29歳のときに音楽教師として英和に赴任しました。1923(大正12)年、東京は関東大震災に襲われ、生徒の中にも４人の死者が出ました。また教師たちも罹

校長室で執務中のミス・ハミルトン

災して出勤できないものも多く、ミス・ハミルトンは初めてのクラス担任となりました。ブラックモア校長の後を受けて1925年にミス・ハミルトンは校長になられました。

木造４階建ての校舎は生徒数が501名となり、しかも寄宿舎も同じ校舎内にあったので大変手狭になり、どうしてもしっかりとした大きな校舎が必要となりました。1933年、創立50周年を目前に、私たちが学んだあの美しい鉄筋コンクリートの校舎が出来上がりました。これはハミルトン校長の指導力とカナダミッションのおかげと聞いています。

この頃の校風は他の日本の学校に比べると自由であったようです。たとえばその頃の欧米のファッションであった髪にリボンをつけるという習慣も持ち込まれ、生徒たちはセンスのよいおしゃれを楽しんだものでした。またお弁当のほかにお菓子を持ってきてもよく、何年か前まで小学部では10時のおやつにクッキーをいただいていたようです。

大正末期には学生の殆どが着物を着、それも派手になる傾向にあったことをミス・ハミルトンは懸念し、洋服の制服を作ることを提案しました。そして試行錯誤ののち今の制服の原型がほぼ出来上がりました。ガーネットとゴールドのスクールカラー、カナダを象徴する楓の形の中に金色のＴとＥをくみ合わせた校章も決まりました。1927年のことでした。また翌年には今でも式典で必ず見られる校旗、講堂に入ると正面にかけられている「敬神奉仕」の標語が決められ、創立50周年にむけて校歌も作ることになりました。北原白秋は校内をくまなく歩き、英和の雰囲気を身に感じとり、作詞をしました。そして山田耕筰が曲をつけ、どこの学校よりも美しい校歌が出来上がりました。

これから日本に起こるさまざまな恐ろしいことを前にして嵐の前の静けさというか、まだ学校の周辺は本当にのんびりとした雰囲気でした。大きなお屋敷が立ち並び、桜並木の間にはガス灯が立っていて、春の夕暮れなどそれは美しい光景だったようです。

しかしほぼ同時期に、いわゆる5.15事件、2.26事件、日本の国際連盟脱退などが起き、ますます国家主義的色彩が強くなってきました。軍の台頭、日中事変、第二次世界大戦と日本は坂を転げ落ちるように平和と繁栄を捨て去っていきました。それと同時にキリスト教教育も学校では今までと同じようにはできなくなってしまいました。

こんな難しい時期にミス・ハミルトンの休暇帰国の日が迫ってきました。1938年英和の歴史の中で初めて日本人の校長が就任しました。一年間の休暇を終え、ミス・ハミルトンは1939年日本に帰っていらっしゃいました。この頃の日本はアメリカとの外交交渉が上手くゆかず、いつ日米間の戦争が起きてもおかしくない状態でした。宣教師を含む在日外国人は次々に日本を離れていきました。しかしミッションの代表であったミス・ハミルトンと主事のミス・コーテスは危険と分かっていても日本にとどまっていました。生徒たちに英語を、そしてキリスト教の教えを少しでも多く伝えたかったのでしょう。1941年12月８日とうとう太平洋戦争が勃発してしまいました。宣教師たちは宿舎から学校へ行くことにさえ危険を感じるようになり翌４月からは教室には出ませんでした。結局1942年７月交換船でカナダに帰ることになりました。職員の送別会も固辞し、僅かの人の見送りを受けてひっそりと宣教師館から出て行かれました。

同級生の森(寺尾)香苗さんからミス・ハミルトンの帰国時のこんなエピソードを伺いました。

日本とアメリカの間で交換船を仕立て、日本にいるアメリカ、カナダの人々はアメリカへ、アメリカにいる日本人は日本に帰国させることとなりました。太平洋航路は危険なのでインド洋を通りアフリカ喜望峰経由でそれぞれの母国を目指しました。一方アメリカから出発した交換船はニューヨークから大西洋を渡り、おなじく喜望峰に向かいました。ロレンソマルケスという港

送別――ミス・ハミルトンと高女科１年２組（1938.2.18）

で二隻の船は出会い、乗客を交換し、それぞれの母国に向かうことになりました。ミス・ハミルトンはこの船に乗っていました。一方アメリカ船には家族を先に日本に帰国させ、米国に一人残っていた寺尾氏が乗船していました。寺尾夫人は英和卒で、２人のお嬢様寺尾早百合さんと香苗さんも帰国後英和の小学部に通っていました。船が臺望峰の港に着き、それぞれの船が並んだとき、寺尾氏は日本から来た船の中を、大きな声で“Mr.Terao, Mr.Terao”と叫びながらあちこち走り回っている女性がいるのに気がつきました。彼女は寺尾氏を認めると“Your wife and your two daughters are fine”と大声で叫びました。この女性がミス・ハミルトンでした。

寺尾夫人は帰国後英和の母の会の会長をしていらしたので、ミス・ハミルトンともご主人の帰国についてお話をする機会もあったと思われます。しかし寺尾氏は日本の事は何一つ分からず、ここで家族が全員無事という情報を始めて知り、どんなにうれしかったことでしょう。

戦後再び来日され、ミッションボードの命を受けて、しばらく山梨英和で教鞭をとり、また東洋英和の理事を務めました。英和の短期大学ができてから幼児教育の教授を1956年まで続け、1956年３月67歳で帰国しました。ミス・ハミルトンは29歳で来日しその人生の大半を日本の子女の教育のために注ぎました。彼女をこれほどまでに動かしたものは彼女の強い信仰と多くの人の祈りでした。先生が最後に帰られるとき次のようなテニソンの詩を残していらっしゃいました。「知識がますます進むように、しかしそれにも増して、敬虔の念が深くなり、私たちの知識と魂が一緒に奏でる音楽が、次第にその調子を高めていくように」

先生は教育者でした。それにもまして信仰の人でした。

1975年に出版されたマウントアリソン大学新聞にはこんな記事が載っていました。

1910年卒　ミス・ガートルード・ハミルトンは今年の３月に死亡した。ベイフィールドに生まれ、両親は故ウェズレイ・ハミルトン牧師、フランシス・ハミルトン。ミス・ハミルトンは音楽をマウントアリソン大学で学び、人生の殆どを日本で宣教師として過ごした。彼女は聖ヨハネ合同教会婦人宣教師支部の終身会員だった。

（1952年高等部卒業）

〈思い出の先生がた〉11

功刀嘉子先生の思い出

恒益　馨

1943(昭和18)年4月、東洋永和幼稚園師範科に入学し、地方出身の私は青楓寮の寮生になりました。功刀先生は寮の東端のお部屋にいらっしゃいました。時折寮生と、一緒に楽しい話をしながら食事をした事、懐かしく思い出します。グリーンの皮ジャケットに紺のズボンとハイカラな服装で、小柄な先生が背筋をピンと伸ばして歩かれるお姿は今も目に浮かびます。

在学中2年間は戦争の最も厳しい時で、先生方は私共の身の安全と健康に大変お心遣いをしてくださいました。1944年には女学生も挺身隊として工場等に勤労奉仕にかり出され、私共は群馬県嬬恋村に男手不足で出荷が滞っているキャベツの収穫と出荷の手伝いに、8月末から一ヶ月余行きました。干俣組と田代組の二班に分かれ私は田代小学校の一教室で先生とご一緒に生活をしました。朝礼では「山べに向かいてわれ目をあぐ」の讃美歌をよく歌いました。夕暮には天然の鹿沢温泉にみんなと一緒に入ってくださいました。戦争とは思えぬ光景でした。

その年の12月26日夜の空襲で、学校周辺も焼夷弾が投下された時、先生は私共には外に出ぬよう厳しく注意をし、湯浅先生とお二人で出火前の焼夷弾を処理され、建物も私共も全員無事に朝を迎える事が出来ました。1945年の元旦は寮生の多くは帰省が出来ず寮で新年を迎えました。先生は「正月中はここがホームよ」とおっしゃって、さみしい私達とトランプやゲームで夜まで遊んでくださいました。その年3月10日の東京大空襲後「卒業は出来るから帰りなさい」と言われ、私は式に出席せず家に帰りました。先生は東洋英和女学院を去られた後、1952(昭和27)年から大阪教育大学の教授に就任なさいました。

1984(昭和59)年11月に東洋英和女学院創立百年記念祝賀会が行われた時、大勢の人々の中に先生のお姿が見えました。お話したくても出来ないままお別れしてしまいました。心残りでしたのでクラスの皆と会合をもちたいと思い、翌年5月箱根湯本で会をもちました。上級生も2名加わり18名で先生をお迎えしました。卒業40周年記念でした。話はつきず温泉に来て入浴も忘れる位でした。それ以後、有馬、甲府、大島、箱根、金沢、京都、鎌倉、名古屋と毎年場所を替えながら会をもちました。先生はどの会にも出席くださり、大変喜んでおられました。楽しい会は名古屋が最後でした。

その後お会いできたのは1995(平成7)年9月半ば、大阪にいらっしゃる先生をお訪ねし、少し早めの90才のお誕生祝いをクラス9名の者で致した時でした。讃美歌とケーキでささやかな会でしたが、大変よろこんで下さり、お別れの際、「ありがとう」と言ってくださいました。その翌年6月10日、先生は天国へ召されました。葬送式は池田市在住の片桐様のご配慮により甲東教会で行われました。同教会での一周忌記念会の後、山梨の山々に囲まれた墓地に納骨されました。私達は「山べに向かいてわれ目をあぐ」「神ともにいまして」を歌いつつ先生に心から感謝を捧げました。聡明で、決断力、ユーモアに溢れた先生のことが今でも忘れられません。

(1945年幼稚園師範科卒業)

功刀嘉子先生略歴

1905年10月14日　山梨県に生まれる
1924年　山梨英和女学校卒業
1926年　東洋英和女学校幼稚園師範科卒業
　　静岡英和幼稚園保母に就任
1930年　静岡ホーム保育園保母に就任
1935年　イリノイ州エバンストン大学卒業
　　(幼児教育、児童心理、教育学等を専攻)
　　東洋英和女学校幼稚園師範科教員に就任(～'48年)。この間、'44年には戦時保育所所長に就任
1952年　文部省の委託により「幼稚園教育要領」作成にあたる
　　大阪教育大学教授就任(～'71年)
1996年6月10日　肺炎のため永眠。享年90歳

〈資料紹介〉 9　年史（3）
『東洋英和女学院百年史』

島　　創　平

はじめに

1984年に発刊された『東洋英和女学院百年史』は、学内担当者のみによる編纂ではなく、日本キリスト教史が専門研究領域である工藤英一氏・塩入隆氏両委員を執筆の中心にすえ、国内外における膨大な原資料を駆使して叙述された。その結果、それまでに発行された何冊かの東洋英和の「年史(年誌)」と比較して、量的にも内容的にもひときわ充実したものとなっている。英和の創立以来百年という節目を迎え、伝統にふさわしい立派な年史を残したいという、編纂委員の意気込みが伝わってくるようである。

この年史の特色は、単に東洋英和の百年の歩みを振り返るだけでなく、英和の歴史を、同時代の日本の歴史の流れと関わらせて、その歴史的位置づけを試みていることであると思う。すなわち、明治維新とキリスト教禁教令の廃止、鹿鳴館外交とその反動、大正デモクラシー、ファシズムの台頭と軍国主義、そして太平洋戦争と敗戦—以上のような19世紀後半から20世紀に至る日本の歴史は、そのまま東洋英和の歩みと重なり合っている。1884年の創立以来、東洋英和の発展と試練の歴史は、常に同時代の歴史的動向を反映して展開していったのである(これに関しては、前回及び前々回の『東洋英和女学校五十年史』と『東洋英和女学院七十年誌』の〈資料紹介〉において、いくつかの具体例を取り上げている)。

カナダ・メソジスト教会の活動

『百年史』では、東洋英和の百年にわたる歴史を振り返るに当たり、まず序章において、英和の成立の源であるカナダ・メソジスト教会の活動について、述べられている。

改めて考えてみると、英和の基礎がなぜ当時のカナダ・メソジスト教会の女性伝道師によって築かれたのか、不思議に思われる。1867年、カナダはイギリスからの独立を達成し、「カナダ自治領」が成立したが、その面積は現在のおよそ十分の一以下であり、人口も約330万人に過ぎなかった。またカナダにおけるメソジスト教会の活動は1765年に遡るが、それから約百年後、未だに教会員数も少なかったにもかかわらず(1873年の信徒数は約7万7千人)、1871年には早くも日本伝道が提案され、1873年に日本でのキリスト教の禁教令が解除されると、早速カックランとマクドナルドという二人の宣教師が、日本に派遣されたのである。独立を達成したばかりで、人的にも、経済的にも、決して豊かな強国であったとは必ずしも言えない当時のカナダにおいて、なぜカナダとの直接関係はほとんどなかったと思われる、極東の小国日本へのキリスト教伝道が、カナダ・メソジスト教会により早くから計画され、実行に移されたのであろうか。

さらに1879年にカナダ・メソジスト教会婦人伝道会社が設立され、1882年カートメルが日本伝道に派遣された。それから二年後、キリスト教布教を目的とするミッション・スクールとして、彼女により東洋英和が設立されたことは周知の通りである。当時の女性の地位は、欧米においても決して高いとは言えず、その社会的活動範囲も制限されていた(因みに、カナダで婦人参政権が認められたのは1918年のことである)。またカートメル自身も、英和設立後僅か一年で帰国を余儀なくされるなど、決して健康に恵まれていたわけではない。このように、当時様々な面で男性より不利な、弱い立場におかれていた女性により創立された東洋英和が、その後も、主としてカナダからの婦人宣教師によって引き継がれ、順調に発展し続けることができたことは、改めて考えてみると、ほとんど奇跡的といってもいいのではないだろうか。やはりここには、人間の思いを遙かに超えた、見えざる神の御手の働きを、思わずにはいられない。

変わりゆく英和

1925年に、カナダ人として最後の校長に就任したハミルトンの校長時代は、英和の一大改革時代であった。創立五十周年を迎えるに当たり作曲された校歌をはじめ、楓の校章、校色(ガーネット及びマリーゴールド)、「敬神奉仕」の標語、そして制服—これら全てはハミルトン校長時代に制定された。さらにまた、1933年に落成

した新校舎は、現在もその面影を色濃く残している。このように、現在まで受け継がれている英和の諸制度は、その多くを直接ハミルトン時代に負っている。

しかし、ハミルトン時代の改革はこれらに留まらず、英和の性格を根本から変質させるものであった。すなわちこれ以後、東洋英和の運営は従来の外国人教師主導型から、日本人教師に運営が実質的に委ねられる方向に進んでいった(『百年史』229ページ)。ハミルトン自身も、1938年に校長職を日本人に譲り、その後1942年に帰国するまで、一教員として英和に奉職した。以後歴代の校長は、いずれも日本人教師が就任している。このように、それまで「婦人宣教師の家塾的色彩を残していた東洋英和女学校は、ハミルトン時代を迎えて急速に学校として整備されたのである(『百年史』230ページ)。」こうした改革がハミルトン時代になされていたゆえに、東洋英和は続く日本の軍国主義と戦争という困難な試練の時代を、無事に乗り切ることができたのではないだろうか。

変わらざる英和

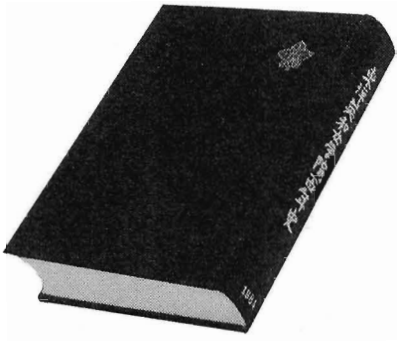
一方、百年にわたる英和の歴史を貫いているのは、「キリスト教教育」という英和の基本的教育方針である。「キリスト教主義」が英和教育の基本方針として明言化されたのは、1899年、学校における宗教教育及び宗教的儀式を禁止した文部省訓令十二号に対する、当時の校長ブラックモアの決断によるものであった。ブラックモアは、これに従わない学校は各種学校とみなされるという不利益にもかかわらず、敢然と「本校ハ基督教主義ヲ本ト」することを明確にしたのである。太平洋戦争下の1943年、当時のキリスト教に対する圧迫から、やむを得ず「キリスト教教育」を削除するという学則変更がなされたが、1945年戦争が終わるといち早く、「キリスト教による教育」が再び明文化され、以後東洋英和は、この基本方針を堅持し続けて現在に至っている。

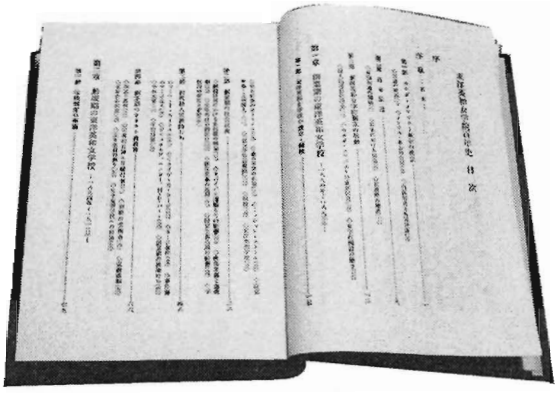
おわりに

以上、『百年史』を通じて、我々は二つのことを学んだ。第一に、英和の歴史は五十年という節目において、大きな変革を遂げていること、そして第二に、それにもかかわらず「キリスト教教育」という英和の基本精神は、百年を通じて一貫していることである。

創立百年を迎えて間もなく、大学が開学したが、これは英和の歴史に新たな局面を切り開くものであった。このような状況において、英和の基本方針である「キリスト教教育」という伝統は、今後どのように受け継がれ、発展していくのだろうか。この問題こそ、これからの英和の歴史を担っていく我々の課題ではないだろうか。

(大学教授・史料室委員)





史料室へのおもな寄贈資料

* 『日本の大学アーカイヴズ』／『大学アーカイブス』№33
* 『日本女子大学学園事典』／『成瀬記念館』№20
* 『実践女子学園香雪記念資料館館報』第２号
* 『中央大学百年史』資料編
* 『拓殖大学百年史研究』第17号
* 『京都産業大学40年史』
* 『あゆみ』№56(フェリス女学院資料室)
* 『湯浅八郎と二十世紀』(国際基督教大学)
* 『躍進』創立四十周年記念写真集(國學院大學栃木学園)
* 『福澤研究センター通信』第３号
* 『関東学院学院史資料室ニューズレター』第７号
* 『学院史料』(神戸女学院史料室)
* 『京都大学大学文書館だより』第９号
* 『東北大学百年史編纂室ニュース』第11号
* 『東北大学史料館だより』№５
* 『オポン１００－長野彌荘長生誕百年記念想い出帳』／『青春の賀川豊彦』
* 『世論時報』第38巻第８号～12号、第39巻１号(村岡花子関係記事掲載)／「1965年９月27日付塩原千代・村岡花子宛長野彌書簡」／
* 『産経学園五十年史』／「グランドオペラマダム・バタフライ」プログラム〔ヒジ・小池関係資料〕
* 大正10年ごろの写真（大正８卒桂幸子さん所持だったもの）／集合写真(年代不詳、中央にミス・コーテスの姿あり)
* 『東洋英和女学校五十年史』／『春まだ浅き頃に』(水野モモヨ著)ほか５冊。
* 小冊子「功刀嘉子先生を偲んで」
* 『統一教会の素顔－その洗脳の実態と対策－』／『原理に入った若者たち』－救出は早いほどいい－／『自立への苦闘　統一教会を脱会して』(川崎経子著、'48年高等部卒)
* *BRITISH COLUMBIA A Wild and Fragile Beauty* ／ *THIS IS MY HOME A CELEBRATION OF CANADA* ／ *BRITISH COLUMBIA A SYMPHONY IN COLOR*（２冊）
* 『美の原点女子美術学校創立・再建の謎』
* 『愛は決して滅びない　アメリカ人女性ロイス・クレーマーをめぐる人々』(依田和子著、'54年高等部卒)
* 手稿「英語の話せない英和の卒業生」(藤田曜子、'47年高等部卒)
* 鳥居坂風景絵葉書２種３枚
* 清野禮先生遺稿集『神を思ふ清らけきもの』(３冊)
* 『生と死』第６・７号（東洋英和女学院大学大学院人間科学(死生学)修了生の会）
* 『日本基督教団　神戸栄光教会百年史』
* 『租税史料目録』明治前期編、大正編
* 「静岡を愛した外国人宣教師ミス・リンゼー」(『静岡の文化』83号掲載、松縄善三郎)
* 手稿「東洋英和女学院昭和十七年～戦後にかけての歴史　国語教師として勤務した比屋根さかえの思い出」
* 『カナダ・メソジスト婦人宣教師における幼児教育事業に関する資料収集・調査研究』(４冊)
* 「亀徳理事長宛　Gwen R. P. Norman書簡」
* 大阪府立豊中高等学校『創立80年記念誌』
* 大正～昭和初期の写真(小澤ふさ先生所持のもの)

1911(明治44)年軽井沢のコテージにて

おもな購入資料

* 『生活と文化〔豊島区立郷土資料館研究紀要第13号〕』
* 『ランダムハウス英和大辞典』
* 『冬の家　島崎藤村夫人・冬子』〔長岡輝子関係〕
* 『からだを語ろう、女から女へ』(丸本百合子著、'67年高等部卒)
* 『乞食王子』〔村岡花子関係〕
* 『赤い薔薇』〔　〃　〕
* 『明治文化の花々』〔大江スミ関係〕
* 『スープ・オペラ』(阿川佐和子著、'72年高等部卒)
* 『ヴォーリズ評伝　日本で隣人愛を実践したアメリカ人』

＜訂正とお詫び＞

№65の８頁、光明先生略歴中の「1976年東洋英和女学院院長就任(～'80.3)」は「(～'85.3)」の誤りでした。訂正してお詫び申し上げます。